

住環境と健康に関する調査

○東 実千代* 新谷 恵** 平岡 典代*³ 足田 洋子*
(*奈良女大 **奈良女大・院 *³大和団地(株))

【目的】近年、人々の健康に対する意識は高まり、一日の大半を室内の中で過ごすことを考え合わせると、住環境との関わりは重要な視点であると考えられる。本調査は居住者の住環境と住生活の現状を把握するとともに、おもに室内の化学物質が原因と考えられる健康障害の実態を探ることを目的とした。

【方法】調査方法は質問紙調査とした。調査項目はWHOの定義によるシックビル症候群の症状を参考に、「独特の臭い(刺激臭)を感じる」など12の症状を設定し、それらの症状の有無および現在の住環境、家族構成等の基本的属性、住宅における暮らし方、健康状況などである。調査期間は1996年8月下旬から9月上旬で、近畿圏新興住宅地を中心に742部を配布し、うち596部を回収した。回収率は80.3%であった。

【結果】調査対象596世帯中75世帯(12.6%)に12の症状のいずれかを訴えている居住者が認められた。これら該当世帯の住環境は、住宅の建築年が新しいこと、環境が都心に近いこと、住宅面積が小さいこと、新工法の住宅であること、日照・通風条件が悪いことなどがあげられた。また冷暖房機器の使用時間や在宅時間、日中の換気状況などの暮らし方との関わりも示唆された。症状については入居後すぐの場合は「独特の臭いを感じる」や「目がちかちかする、涙がでやすい」などの申告が多く、入居後1ヶ月以上経過した場合は「疲れやすい」「体の調子が悪い」などの申告が多く、経時による違いが認められた。